誰だって人生波瀾万丈

コウヤサトシ

一九八〇～八五年頃をいっしょに過ごした大学時代のサークル仲間と久しぶりの同窓会を開いた。卒業以来の再会もあって、深夜まで話が尽きなかった。

私が所属していたサークルは「西南旅行愛好会」という。名前からすると、とてもミーハーで軟派な感じがする。まあ、実際のところ、私はそのサークル名に惹かれて入部を決めたのだったが……。

ただ、実態は全然違っていて、将来的に「ＪＴＢ」などの大手旅行会社に就職をめざす、きわめて硬派の就職活動サークルであった。入部当時は、女子部員は一人もおらず、先輩のいうことは絶対で、教えてくれるのは酒席のマナーに麻雀の適当な勝ち方負け方など、将来旅行会社でやっていくのに必要な処世術を身につけるための完全縦社会のサークルだった。

さて、私も含めてそこに集まってきた仲間は、当時「旅行会社に就職したい！」という願いを持っていた。でも卒業後、全員がその仕事に就けたわけではなかった。めでたくその夢がかなったものもいれば、就職試験の段階で夢破れたものもいる。私みたいに、学業不振から早々にその夢をあきらめ、他の道を歩んだものもいた。

そんな仲間たちが、三〇年後どんな人生を送っていたか。今回久しぶり集まって話をしてみると、これがけっこうドラマチックで、まさに波瀾万丈。みんなそれぞれすごいことになっていた。いっしょに大学生活を過ごした仲間たちの波瀾万丈の三〇年を紹介してみたい。

コジマ先輩

三つ上の先輩で、とてもやさしく面倒見のいい人だった。大手旅行会社の最終面接までいったのだが、最後の最後で強力なコネ人事に敗れ、内定を取り消されてし

まった。仕方なく、福岡の小さな旅行会社に就職した。
だが、そこで博多織問屋のお嬢様と出会い、華麗なる転職。博多織問屋の若旦那におさまり、しばらくは悠々とした暮らしを送っていた。ところが、折からの繊維不況で、会社は傾き、あっけなく倒産。仕方なく勤めなれた旅行業界に戻ってきた。しかし、その再就職先の会社もすぐに立ちゆかなくなってしまった。今度は取引先の会社に拾ってもらう形で再度転職。
ここまででもうかなり波瀾万丈だが、新しく就職した会社でさらなる試練が待っていた。最初は、東京に一年だけの単身赴任の約束だった。が、これが中途採用のつらいところ。その後、会社の都合で札幌→沖縄→東京と、いわれるままに十三年間にもわたる単身赴任生活を強いられることとなった。
昨年、やっと福岡の家族の元に戻ってきたが、長い間家族といっしょに暮らしていなかったので、今も子どもたちが妙によそよそしいのだという。
「コウヤくん、公務員はいいよねえ。こっちはいわれたらどこでも行くしかないからね。おれたちはしょせん将棋の駒だから……」
コジマ先輩のまとめの一言。けだし名言である。

オオクマくん

一年後輩。大学時代からいけいけドンドンの突進男だった。念願かなって業界最大手の旅行会社に就職。そこでもモーレツ社員ぶりを発揮。昼夜を問わず働いて営業成績をぐんぐん伸ばし、三十代で課長に昇進。同期社員でいちばんの出世を遂げた。と、ここまでは順風満帆。ところが、部下にも自分と同じようないけいけドンドンを強要して大失敗。いわゆるパワハラで沈没してしまった。
今回、久しぶりに会ったのだが、バリバリのエリート社員の頃の面影は潜めてしまって、すっかりしょぼい中年サラリーマンの雰囲気を醸し出していた。今は、部下がいない課長でがんばっているそうだ。いろいろつらいこともあるのだろう。酒に負けることがなかった彼だが、この日はいちばん最初に酔っぱらってしまっていた。
オオクマくん曰く
「センパイ！　おれはですねえ、昭和三十年代ですか『三丁目の夕日』のころ。あ

のころに働きたかったとですよ。高度成長期やったらおれのやり方でよかったとですよねえ。この時代は、おれにはむいとらんですね……」

時代が時代ならきっと今頃会社をしょっていただろうオオクマくん。生まれる時代を間違えてしまったようだ。

ミルクさん

三〇年ぶりの再会だった。本名はすっかり忘れてしまっていた。私が勧誘したサークル女子部員一期生だ。当時からとても美しい子だったが、三〇年たった今も変わらずきれいな女性だった。彼女は、大学二年生の時いきなり結婚して、そのままサークルを辞めた。子どもを産んだと風の便りに聞いていたが、それっきり会うこともなかった。同期のいずみくんの計らいで、今回本当に久しぶりの再会となった。

彼女の話によると、子育てしながら大学を卒業し、その後、すぐにご主人の勤める横浜に移り住んだそうだ。ところが、ご主人はいきなりの単身赴任。で、知った人も誰もいない横浜の地で、子育てに追われる毎日を過ごすことになった。そのうち、なりゆきでご主人の両親の介護まですることになった。これだけでかなり波瀾万丈である。

そんな日々が二〇年ほども続いたが、やっと一緒に住めるようになった。ところが、それがいけなかった。これまでみえなかった相手の欠点がたくさん明らかになってきて、かえってご主人との仲が悪くなったのだそうだ。この話に先のコジマ先輩がいたく共感し「まさに亭主元気で留守がいい！　だねえ」と二人で大いに盛り上がっていた。

結局、旦那さんとは折り合いがつかなくなり、ほどなく離婚となってしまった。子どもたちも独立して手が離れたので、昨年福岡に戻ってきたそうだ。もともと優秀な彼女は、今は生命保険会社に勤め、順調に成績を伸ばしている。若い頃からいろんな苦労を経験しただろうに、全然暗さはなく

「若い頃にもどって人生を楽しんでます！」

と生き生きと話してくれた。

同じ時代を同じ学校で過ごした仲間たちは、三〇年後、こんなにもちがう人生を

歩んでいた。ちょうどあの頃流行ったドラマに「ふぞろいの林檎たち」というのがあったが、まさにあのドラマの世界のようだった。同じ夢を持って集まった仲間たち。それぞれ社会に出て、仕事や家庭の様々な問題にぶつかり、そこで悩みながらもがんばって生きていた。

「あきらめないでよかった。夢は必ず叶う」

と、オリンピックのメダリストの誰かが言っていた。確かにそういうこともあると思う。でも、そういう人ばかりではない。むしろ、夢が叶う人の方が少ないのではないだろうか。

がんばっても叶わない夢もある。そして、夢が叶ったと思ってもすぐに潰えてしまうこともある。ただ、夢は叶わなかったけれど、夢は破れたかもしれないけれど、今回集まった仲間は、誰一人そのことを後悔したり恨んだりしてはいなかった。そりゃあ泣き言の一つ二つはいうけれど、みな、前を向いて一生懸命生きていた。コジマ先輩が、

「明日があるさあ～。なあ、みんな……」

と、学生時代から変わらない赤塚不二夫に似た顔で笑っていた。

全くその通りだ。人生、思い描いた通りにはならないことがたくさんあるけれど、明日はまた明日。ポジティブに生きていれば、きっと未来は開けるのだ。それでいいのだ！

「よし！　おれも前を向いてがんばろう！」

と、懐かしい仲間たちとわかれ、最終電車で家路についた。

電車の中には、だらしなく眠るサラリーマンやぼんやりと外を眺めているキャリアウーマン、ずうっと携帯の画面から目を離さない若者など、様々な人が乗っていた。

ここにいる彼らにだって、きっと波瀾万丈の人生があるのだろうなあ……とぼんやり思った。もちろん私にも波瀾万丈の人生がある。

人生は、誰だって波瀾万丈なのだ。